

第一章

1

「ねえ、ユイちゃん。ナオの秘密、知りたい？」

すでにベロベロに酔っているリリカちゃんが、ナオ君の肩に腕を回しながらそう言った。小悪魔的にニマニマと笑う表情は可愛らしくて、酔いのせいで頬がほんのりと赤くなっている。

ナオ君は肩に置かれたリリカちゃんの腕を振り払う。

「なに言うつもりだよ。ていうか、リリカ飲みすぎ！」

「なんだよお。せっかくユイちゃんとの宅飲み会に呼んであげたのに、なーにクールぶっちゃってんですかあ？」

「クールぶってない！ ごめんね、ユイちゃん。こいつの言うことは気にしないでいいから」

ナオ君はリリカちゃんに向けていた厳しい表情を一変させて、私には優しげに微笑んだ。ちよつとだけ、疎外感。

「秘密……教えてくれないの？」

いつもならこんな図々しいこと言えない。だけど、お酒の力もあつてそれは簡単に口に出すことができた。訊くと、ナオ君の口元は引きつり、体がギクリと固まる。その隣でリリカちゃんは本当に嬉しそうに嘲笑^{わら}った。

——大学三年になる前の春休み、私は本屋でバイトを始めた。新人の教育係になったのは、同い年のリリカちゃん。リリカちゃんと
はそこで初めて会話をしたけれど、私は彼女のことを知っていた。
学部は違うけれど同じ大学に通っていて、よく見かけていたから。

いつもお洒落で、いつも友達に囲まれていて、いつも楽しそうに笑っている女の子。住む世界が違うと思ったのも最初だけで、バイト先で会話をするようになったりリリカちゃんとは意外と気が合った。

春休み中、お互いにたくさんシフトを入れていたから、週のほとんども一緒に過ごして、バイト終わりには遊びに行ったりして。

春休みが明けてからも、大学構内で見かければ声をかけ合って、そしてリリカちゃんは幼馴染だというナオ君のことも紹介してくれた。

「ユイちゃん、ナオの秘密気になるよねえ？」

リリカちゃんはナオ君の肩にしなだれかかりながら、やっぱりニマニマと笑っている。その表情は少し（すごく）意地悪な感じで、でも可愛くて、ちよつとドキドキする。

リリカちゃんの築浅マンションのワンルームの部屋は、本人同様お洒落で整っている。木目調のブラウンと明るいオレンジがメインカラーとなっていて、統一感のあるインテリアには拘りみたいなものを感じる。

小学生の頃から一緒の学校に通っているというナオ君は、リリカちゃんの部屋に入るなり自ら宅飲み of 準備を始めていて、その手際の良さと、キッチンのどこに何があるのかを把握している様子は、まるでこの部屋に俺も住んでますって感じ。

垢抜けたイマドキの大学生といったビジュアルの二人が体をくっつけているのを見ると、少しだけ居たたまれない気分になる。二人と比べてしまうと私はあまりにも普通すぎるから。

リリカちゃんのスラリとした体を押し退けようとしているナオ君は、リリカちゃんが余計なことを言わないように口を塞いでいる。

なんだろう。カップルが酔ってイチャついているところを見せられていような。さつきは「秘密を教えてくれないの？」と訊いてしまったけれど、もしかして私、帰ったほうがいい……？

もう夜も遅いとはいえ、リリカちゃんのマンションから駅は近しい、まだ終電までは時間がある。帰るなら今のうちだよね、と時計を見ていると、ナオ君の手に口を塞がれていたリリカちゃんは立ち上がって私の隣に座った。ナオ君にしていたように、私の肩にしないでかかろ。リリカちゃんの甘い香水の香りにドキリとした。

この子にはこういうところがある。ふらりとくつついてきては人

をドキドキさせて、そしてまたどこかに行ってしまうような。掴みどころがなくて、まさに小悪魔って感じの。

「ナオにはね、二つ秘密があるんだよ」

「……ふたつ？」

「そう。ふたつ」

こてん、とりりかちゃんの頭が私の肩に倒れる。ローテーブルを挟んで正面に座っているナオ君はその様子を凝視していた。私にはナオ君の表情の意味を読み取ることができない。自分の彼女が他人とくっついているから、気になっている、みたいな。

「ユイちゃん、知りたい？」

リリカちゃんの挑発しているような声が耳元で聞こえる。挑発つて、誰に？

私はちらりとナオ君を見てから、我慢できずに頷いた。リリカちゃんが私の肩から顔を離して、そして今度は耳打ちしてくる。ソコソと内緒話でもするように。

「リリカ、待て！」

ナオ君がローテールに片手をついて身を乗り出してきた。伸ばされた手がリリカちゃんの腕を捕まえるより前に、吐息混じりの声

が耳を掠める。

「……ナオはね、春休みより前からユイちゃんのことを好きなんだよ♡ 気づいてた？」

「えっ……」

信じられないことを言われて、体を離してリリカちゃんを見た。不敵に微笑んでいる表情は私をからかっているようにも感じられる。

リリカちゃんはナオ君に顔を向けた。

「あはは、言っちゃったー♡」

「おい！　なに言った!？」

「んー、ナオが隠してることだよお」

「……っ」

膝立ちになっていたナオ君は、脱力して床に腰をつけ、初めて見る表情を浮かべた。さっきまで「俺って酒を飲んでも顔色が変わらないんだよね」と言っていたのに、今ではおでこまで真っ赤になっ
てしまっているし、唇がわなわなと震えている。

「違うんだ！　ユイちゃん、誤解！」

「えっ、誤解……?」

「そう、リリカの言うことは全部ウソ！」

「あ、そうだよ、ごめん……」

今度は私が顔を赤くする番だった。

リリカちゃんがナオ君を紹介してくれたとき、一目見てかっこいい男の子だなんて思った。話してみるとすごく優しくて。でも、すぐにリリカちゃんとの仲の良さを目の当たりにして「ああ、これは好きになっちゃ駄目なやつだから気をつけよう」って思ったりして。

ナオ君が「本当に違うから、絶対に信じないで！」と何度も何度も

も繰り返してくるから、なんだか少し落ちこんでくる。小悪魔というより悪魔的なリリカちゃんは、私たちを眺めながらチューハイを飲んでいる。

あわあわとしているナオ君が可哀想になってきて、「冗談だっけ分かってるから大丈夫だよ」と言った。笑みを作ろうとしたけど、たぶん苦笑いになってしまった。ナオ君はホツとした表情をしている。

「ナオ君とリリカちゃんは付き合ってるんでしょ？」

「え……、は!？」

ナオ君のホツとした表情も一瞬だけで、すぐに眉間に深い皺が作られた。

「二人は付き合ってるのかなあって思ってたし、ちゃんと分かってるから大丈夫！」

「ちょ、ちょっと待って!? ユイちゃんはなんの話してる？」

「え……?」

あれ?　なんか、もしかして会話が噛み合っていない?

私とナオ君が「んん?」となっていると、リリカちゃんが吹き出した。肩を揺らして笑っている。

「あっはは！ おもしろく！ 二人ですれ違いコントしてるく！」

「おい、リリカ！ ユイちゃんになに言った!？」

「だからあ、ナオが中々言い出せないことを言っただけだ。あげたんだってば。『ナオはユイちゃんのこと大好きなんだよ♡』って」

「なっ、……………なんだ、そっちなか……………って、勝手に言うなよ！」

ナオ君が大きな溜め息を吐いた。ローテーブルに肘をついて、右手のひらで顔を覆う。

わけが分からなくて見つめていると、こちらを窺^{うかが}うような瞳が指の隙間から覗いた。微かに涙目になっているナオ君が、弱々しく言

う。

「なんで言うんだよ……。こんなふうに伝えるはずじゃなかったのにさあ。ほんつとにリリカ最悪。きらい」

「だってナオ、一生うじうじ悩んで言わないんだもん」

「だからってさあ、俺にだって考えがあったんだよ。俺がユイちゃんに話しかけようと思うといつも邪魔しに来やがって。だいたいお前は——」

「ちょ、ちよっと待って！」

私の話をしているくせに、私を置いてけぼりにし始めた会話に

割って入ると、二人は話すのをやめて私を見る。「なあに？」と悪びれる様子もなくニコニコしているリリカちゃんと、しゅんとした顔で上目遣いをしてくるナオ君。まだまだ付き合いは短いけれど、この二人にはこういうところがある。

リリカちゃんとナオ君はどんなに二人の世界に突入したとしても、私が声をかけたらすぐに会話を止めてこっちを見てくれて、私の言葉を待ってくれる。

急に大人しくなつて私を見つめる二人に訊いた。

「二人は付き合い合ってるんじゃないの？」

「こいつと!? 違う! ありえない!」

「ナオとは仲良しだけど、付き合うのは無いかな」

ハッキリとした否定に、今度は私が脱力してしまった。でも、この二人の距離感はただの幼馴染というには近すぎるような……?
「ユイちゃん、まじでその誤解は解消させて。俺はリリカと付き合っていないから」

「そう、だったんだ……」

そうだったんだ、じゃあ、あれ? ナオ君って本当に私のことが好きなの?

どんな顔をしていいのか分からなくて、口をきゅつと結んで視線を下げた。ナオ君も恥ずかしそうにしているのが分かる。

「ナオは、元々ユイちゃんのことを知ってたんだって」

「そうなの？」

「あ、……うん。大学で何度か見かけたことあって、か、可愛いなって思ってた」

「どもるな、きしよい」

「うるさい！」

リリカちゃんが私の腕に抱きついてきて、ナオ君に向かって

べーっと舌を出した。

「ナオがモタモタしてる間に、私が先にユイちゃんと仲良くなっちゃったの♡ 紹介して紹介してってうるさいから、仕方なく会わせてあげたってわけ。で、ユイちゃん的にはナオはどお？」

どお、って……。

二人から熱い視線を感じる。私も、ナオ君は優しくてかっこいいと思っでいて、でも今はそれよりも。

潤んだ瞳を向けてくるナオ君の頬がほんのりと赤い。その不安そうな表情に胸が苦しくなった。さっきよりも呼吸が浅い気がする。

ナオ君はかっこいいというよりも――。

「あの、私も」

「あ！ 待って、ユイちゃん」

私も。その続きを言う前にリリカちゃんに遮られた。

「ユイちゃんにもう一つのナオの秘密を教えるの忘れてた」

「もうひとつ？」

「そう。付き合うとしても、隠し事されてるのは嫌だよね？」

リリカちゃんは意地悪に笑む。

「リリカ、まじでやめて！」

「うるさい。私はユイちゃんと話してるの。ナオとは話してませーん。ユイちゃんだって、隠し事してる人とは付き合いたくないよねえ？」

問われて、ちよつと考える。ここまで引つ張られたら気になるし、リリカちゃんの言うとおりに隠し事されたまま付き合うのは不安かもしれない。というか、すごーく気になる。

「うん。知りたい。ナオ君、だめ？」

「う……」

「どんなこと？　悪いこと？」

「わ、悪くはないと思うけど、でもすごく恥ずかしいことで！」

「私、笑わないよ？」

「絶対引かれるし……！」

「そんなに言いたくない？」

「言いたくないっていうか、ユイちゃんに嫌われたくない！」

背筋が丸まって小さくなってしまったナオ君が可哀想で、どうしようかと考える。

「あー、じゃあ、私ね、実は彼氏できたことないの。周りで彼氏いたことないの私だけで、ちよつと恥ずかしいんだ。……引く？」

「え!? そんなことで引くわけない!」

「やーん、ユイちゃん優しい♡」

「ありがとう。ナオ君の恥ずかしいことも引かないかもしれないでしょ? 教えてほしいな」

だめかなあ……? と問いかけると、ナオ君の唇が震える。理由は分からないけど、私のことを好いてくれるのは本当みたい。好きな子にお願いされて断りにくい、そんな感じ。

「ユイちゃんがここまで言ってくれてるんだからさあ、隠し事は駄目だよねえ?」

「くっ！ 分かったよ！ 言っていい！」

「言っていいってなに？ 自分で言えよ」

「はあ!？」

できるだけ優しく見えるように笑う私と、その隣で意地悪に嘲笑わらうリリカちゃん。その視線がナオ君に向かっている。

目がぐるぐるになってしまったナオ君が勢い良く立ち上がった。

廊下に置いてある冷蔵庫の前に立ち、度数高めのハイボールを取り出す。ぷしゅ、とプルタブを開けて、ごきゅごきゅと一気飲み。

あっという間に空になった缶を握り潰して、乱暴にゴミ箱に捨て

た。

ナオ君は元々座っていた場所ではなく、私の目の前にドカッと腰を下ろす。膝がくつつく距離で顔を近づけてきて、リリカちゃんがいる方とは反対側の耳元に口を寄せてきた。リリカちゃんとは違う匂い。男子とこんなに近い距離になったのが初めてで、くらりとした。

ナオ君が微かに口を開いたことで、吐息が耳にかかる。咄嗟とっさにきゅつと目を瞑つむって――

「……おれ、尻でイケるんだ……っ」

そして、はたと目を開けた。

「……へ？」

何を言われたのかよく分からない。その言葉の意味を頭の中で処理できなくて、耳打ちをした本人を見る。ナオ君は真っ赤な顔を両手で隠してしまっていた。骨張った指の先まで赤く染まっている。

固まる私とナオ君を見て、リリカちゃんは爆笑した。

「やばあ！ 本当に自分で言ってる！ ナオ、まじで最高。信じられないほどのバカ！」

「うるさい！ ユイちゃんに隠し事したくないから言ったんだ！」

「だからってさあ、おもしろすぎるゝ！」

リリカちゃんが背中を抱きついてきた。私の胸の前で両腕をクロスさせて、親密な距離で言う。

「ねえ、ユイちゃん。今の聞いてどう思ったゝ？」

「えっ、どおって。なんて反応すれば……」

「ぶっちゃけると、大学生になってから私がナオのお尻を開発しちゃったんだよね」

「オイ！」

リリカちゃんはけろりと言ったのける。二人は付き合っていない

としても、セフレってやつではあるのかな。そう思っていると、リカちゃんも察したのかすぐに否定する。

「だからってね、セフレではないの。ナオとはヤツたことないしー、もちろんキスもしたことない。私はナオの前で服を脱いだこともないよ」

「そう、なの？ えっ、んん？」

「意味分かんないよねえ。でも、単純な話なの。私が男のアナル責めに興味があつて、試しにナオの体を使って遊んでただけっていうか。そしたらさ、ナオがそれにハマっちゃって。こいつ絶対にユイ

ちゃんにそれ言えないだろうからー、こうやって私が言えるようにしてあげたってわけ♡」

私って優しいでしょ？　と得意げに言うリリカちゃんはやっぱり小悪魔的だと思う。ナオ君は羞恥に耐えられないのか両手で顔を覆ったまま俯いている。

「ユイちゃん、ナオのこと引いた？」

「えっ、あの、えーと」

「……っ」

なんて言っているのか分からない。口ごもっていると、ナオ君は

俯いたままちらりと私を見上げてきた。前髪の間から覗く不安げな瞳が潤んでいて、未だに距離が近くて、ナオ君の膝に当たっている自分の脚が熱い。触れているところに神経が集中しすぎてピリピリする。

「ひ、引いてない！ 全く！」

「……え？」

「でも、あの、ちょっと不安かも！」

「およ？ どうしてユイちゃんが不安になるのー？」

「だって！」

だって……っ！

ローテールの上にある飲みかけのレモンサワーの缶を手に持った。さっきナオ君がしたみたいにな、私も一気に飲み干そうとして、それは途中でリリカちゃんに後ろから奪われる。

「ちよちよちよ、一気飲み駄目！　どうしたの？」

「だって、私、今まで彼氏できたこともないのに、私がナオ君の、……お尻……で、きもちよくしてあげる自信ない！」

ヤケになってそう言うと、ナオ君は目を丸くした。

恥ずかしがっているナオ君はとても可愛かった。元々好きだなと

思っていたのに、更にあんな可愛い一面を知ってしまったら本気で好きになっちゃう。正直付き合いたい！でも、彼氏も男友達すらもできたことのない私に、ナオ君を満足させることができるの!?

「ユイちゃん！ そんなこと気にしないでいいから！ 俺はユイちゃんと付き合えるならそれだけで……」

「やなの！ 私も、ナオ君のことイかせたいの！」

「ええ!？」

私に抱きついたままのリリカちゃんの手に、自分の手を重ねた。そのまま体をひねり、膝立ちしているリリカちゃんを見上げる。

「だから、リリカちゃん。私にやり方を教えてくれる？」

お願いすると、リリカちゃんは目をぱちぱちとさせてから、すぐに優しく微笑む。

いいよ♡ と快諾したリリカちゃんは、私から奪ったレモンサワーを一口飲んだ。

「ちょっと待って!? 本気!？」

「ユイちゃんはこの椅子座ってね」

リリカちゃんがシングルベッドの上にクッションを置いて、私に
おいでおいでと手招きをした。壁に立て掛けるように置かれたマカ
ロン型のクッション。言われるがままにそこに座ると、リリカちゃ
んはベッド下からプラスチックの収納ケースを取り出した。なんて
ことなく蓋が開けられて、覗き見ると、エロい用途で使うと思われ

るグッズがどっさりと入っているから目を見張ってしまふ。

「これは潤滑ゼリーでしょー。あと指につけるゴムとお、ディルドもあるよ♡」

「わああ、すごいね」

「ユイちゃんもこういうの興味あるんだあ。楽しいなあ」

「ねえ！ 俺のこと無視しないでくれる!？」

ナオ君は部屋の隅に立ち、ベッドの上で向かい合って座る私とリカちゃんに向かって吠えた。

「無視してないけど。ていうか早くこっち来なよ。何してるの？」

「いや、本気かよって言ってんの！」

「はあ？　好きな子のこと疑ってるんですかあ？　ユイちゃん、本気だよねえ？」

リリカちゃんが私に向かって「ねー」と同意を求めてくるから、ナオ君には少し申し訳ないと思いつつも頷いた。

「……私もナオ君のこと気持ち良くできるようにになりたい。だめ……？」

「……っ！　だ、だめじゃ、ない！　けどさあ！」

「ちょっろ」

「うるさい！」

私が手を差し出すと、ナオ君は吸いこまれるみたいにしてフラフラと近づいてきた。躊躇しながらも手を握ってくれて、すぐく葛藤している様子を見せてからようやくベッドに上がってくれる。

ベッドの上で壁に背中を預けて座る私の前に、ナオ君は向かい合うように両膝をついている。リリカちゃんがその後ろにいて、乱暴にナオ君の背中を押した。体勢を崩したナオ君は、「わ！」と声を出して、私の顔の横にある壁に手をつく。私の脚に跨るようにして膝立ちになったナオ君によって、壁に閉じこめられる。吐息がかか

るほどの至近距離に、二人でカアアと赤面した。

「ごめん！」

「ううん！ 大丈夫！」

「いやあ、なんだか初々しいねえ。お二人とも♡ ねえ、ユイちゃん。ナオのベルト外せる？」

心臓がばっくんばっくんと暴れていて、リリカちゃんの声すらちゃんと聞こえてこない。それでもベルトを外してという指示は理解できて、震える手をナオ君の腰に伸ばした。手元は見えないまま、このあたりかな？ と触れると、たった十五センチほどしか離

れていないナオ君が息を飲んだのが分かった。

「ユイちゃんっ、待って、だめっ」

「わ。ごめん。……これ、もしかして勃ってる？」

「う、言わないで……っ」

お洒落なワイドパンツの布地は柔らかい。ベルトを探すためにさわさわと撫でると、経験のない私でも、そこが硬くなっていると分かった。

「ベルト、外してもいい？」

目をジッと見つめながら訊くと、ナオ君の熱い呼吸が降ってくる

る。「うんっ」と頷いた声は小さかったけれど、ナオ君のいっぱい
いっぱいな感じが伝わるくらいには私とナオ君の距離は近い。

手元が見えないまま指先を動かしてベルトを外す。わざとじやないけど何度かナオ君の股間を掠めてしまつて、その度にナオ君は苦しげに身をよじつた。「脱がすよ……？」と告げてから、ワイドパンツと下着を脱がせる。リリカちゃんがそれを回収して、ベッドの下に放り投げた。

「やば、ガチガチじゃん。興奮しすぎ。おもしろ」

「や、言うな！　ばか！」

「もしかして、期待してた？　ユイちゃんといつちなことできるかもって」

「そんなの、してない……っ！」

恥ずかしさから逃げるように、ナオ君はぎゅうと目を瞑ってしまふ。目が合わないことがなんだかつまらなくて、ナオ君の火照る頬に手を当てた。

「期待してなかったの？　いやだった？」

「ちがつ、そうじゃなくて！　俺は、普通にユイちゃんと進展できたらいいなって思ってたんだよ？」

「そっかあ。でも私は……すごく興奮してる。ナオ君の恥ずかしがつてるところ見たい。私に見せて？」

「なっ、ユイちゃん、ずるいよお」

弱々しい瞳は潤んでいて、明るい照明の光を受けて煌めいている。男子のこんな弱い姿、初めて見る。かわいい。もつと見たい。

「笑っちゃうよね。こいつ、口ではイヤイヤって言うのが好きなだけで、本当はめっちゃくちやにしてほしいんだよ」

「ちがう！」

「ウソつき。じゃあどうしていつも準備万端なの？」

リリカちゃんは四つん這いに近い体勢になっているナオ君のお尻側について、プラスチックケースから何かを取り出した。右手の指にゴムをつけて、とろりとしたものをチューブから絞り出す。くちやと音がして、リリカちゃんがナオ君のお尻に手を当てた。ナオ君から「ひゃ」と声が漏れる。

「ちが、違う！ リリカが、いつも無理やり、するからっ」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。ユイちゃん違うよ？ 私、無理やりなんてしたことないからね？ いつもナオが強請^{ねだ}ってくるからしてあげてるだけだもん」

私の位置からはリリカちゃんは何をしているのか見えない。それでも、ナオ君の「は、は、」という短い呼吸が顔にかかる。温かくて、お酒の匂いがする。

「ナオ君、そうなの？」

「ちがつ！ リリカが、いつも酷くて、」

「引かないし笑わないから、本当のこと教えて。ナオ君が嫌ならやめでもいいんだから」

「ううつ」

ナオ君のすごく葛藤している表情にゾクゾクする。私がナオ君の

返事を待っていると、リリカちゃんもクスクスと笑いながら手の動きを止めた。何かを言わないとこの状態のままだと察したのか、ナオ君は覚悟を決めたみたいに大きく息を吸う。

「だって、リリカが酷いんだよっ。おれ、こんなの嫌なのに、きもちよくて、」

「うん」

「ユイちゃんが好きなのに、ユイちゃんもしてくれるって言うから、おれ……っ」

「ふふ、そうだね」

目にかかっている前髪をよけてあげると、震える唇が可愛いお強請りをした。

「今日、おれが恥ずかしいのがんばったら、ユイちゃんもしてくれ
る……？」

ずる、と腰が滑るかと思った。あまりにもかわいい発言に、心臓を鷲づかみされる。なにこれ、なにこれ。自分の顔が熱くなっているのを感じる。なんて返事をすればいいのか分からなくて、はわわ
として、リリカちゃんが言った。

「ユイちゃん、続きやってもいい？」

許可をするのはナオ君じゃなくて私なんだ……と発見をしてから、私もそこを突っ込むことはせずに「うん」と答える。

「あとでやり方は教えるけどお、今は特等席でナオのこと見てあげて♡」

「——アッ！ まっ、まっで、や、」

おそらく、リリカちゃんがナオ君のお尻に指を穿^{うが}っていった。ナオ君のえっちな声は、話するときよりも少しだけ音が高い。鼻にかかるとような声をもっと聞きたいのに、ナオ君はベッドについていた方の手で口を塞いでしまった。

「だめだよ」

それは許せなくて、ナオ君の手を奪う。難なく剥がすことができたナオ君の手に自分のそれを重ねた。恋人繋ぎをしてきゅつと力をこめると、ナオ君も握り返してくれる。

「あつ、ゆいちゃ、これ、……っ、声はずかしい、からあ！
んっ」

「ううん。かわいいよ。もっと聞かせて」

「んっ、あつ、やあ」

ナオ君のやらしい声と混ざって、くちや、ぬちや、と卑猥な水音

が聞こえてくる。

「ほんつと変態。好きな子の前でアナル責めされて悦んでるとか、やっぱ」

「るさ、いつ！ んあっ」

「ほら。ちゃんと可愛くしてないとユイちゃんに嫌われちゃうよ
〜？ かわいい声出せよ」

リリカちゃんが膝立ちになり体勢を変えた。目の前にあるナオ君の口がだらしなく開き、真っ赤な舌が覗く。瞳孔がきゅつと絞られた。

「——ッッ！ や、だめ！ それっ、やあ！ んっ、あっ、い、あ」

「あー、だめだめ。ガチ喘ぎは可愛くないってー」

「だめえ、あっ、ゆいちゃ、見ないでえ……っ！ んんっ、やあ」

「ユイちゃん、今ね、ナオが大好きな場所をとん♡ ってしてあげてるだけなの。それだけでこんなになっちゃうんだよ。ナオってほんとちよいよね」

「あっ、これやら、ああっ」

壁に手について体を支えているナオ君だけど、次第に体が落ちて

いく。私の肩にナオ君の顔が埋められた。

「ごめ、ゆいちゃ、ゆいちゃん、……っ、」

恋人繋ぎをした手が、痛みを感じるほど強い力で握られている。骨張った指からナオ君の興奮が伝わってきて、私にも移ってしまふ。なんだか堪らない気持ちになってきて、私は空いている方の手をナオ君の体の下に潜りこませた。

お腹にくっついてしまうんじゃないの？　　ってくらい勃起上がっているあそこに触れると、燃えてるみたいに熱い。肩に当たっているナオ君の口が開いて「あぁっ」と声を漏らした。

「ナオ君、私も触っていい？」

ナオ君がコクコクと頷くから、汗でしっとりしている黒髪が私の頬をくすぐる。正面に視線を向けると、リリカちゃんと目が合った。

「ナオ、良かったねえ。そっちはいつも自分でやるのに、今日はユイちゃんに触ってもらえるなんて」

「る、さい！　う、あつ」

「そうなの？」

「そうだよお。私はナオのアナル開発しかしてないから、他は触つ

たことないよ」

当然だよ？ と、リリカちゃんは小悪魔な表情で笑う。

当然なのかな？ 不思議な関係な気もするけど、まあ私は男女の関係については疎いので。リリカちゃんと言うなら、それは当然なのかもしれない。

「痛かったら教えてね」

ナオ君の耳元に語りかけてから、ぬるぬるとしている硬いそこを手のひらで包んでみる。リリカちゃんが使った潤滑ゼリーが流れているのか、滑りがよくて触っているのもなんだか気持ち良い。

「アッ、」

「痛い？」

「い、いたくない、っ！ ゆいちゃ、」

指先でふにふにと優しく揉むと、ナオ君が身じろいだ。リリカちゃんはお尻から手を抜いてニヤニヤとしながらそれを眺めている。

「どうしたら気持ち良くなるの？ 分からないから教えてほしい」

「や、恥ずかしい……っ！」

「触らないでほしい？」

「ちが、ちがうけど！ んっ、ユイちゃん、いじわるしないでっ」
ナオ君が顔を離して、私の肩に両腕を回した。真正面にきたナオ君の顔がへなへなで、必死で、かわいい。『頼れる男子』とは正反対のような、弱々しい姿。それでも、嫌いじゃない。むしろ好きだっと思う。もっともっと泣いてほしい。

「いじわるじゃなくて、ナオ君が嫌なことはしたくないだけ。ナオ君がしてほしいって言うことしかしたくないの」

「う、でも、」

「言ってくれたら、なんでもしてあげる」

「くっく！」

ずるいことを言っているって分かってる。これは詭弁で、ナオ君を追い詰めている。言葉は優しく聞こえるけど、実際は真逆だつてことも。でも、甘やかすように言うのと、ナオ君の唇が震えるから。嬉しそうに目を細めるから。

ドキドキしながら、「教えて？」と囁くと、ナオ君は簡単に折れた。

「ユイちゃ、してっ」

「なにを？」

「やさしく触るんじゃないくて、擦ってほしい……っ！」

「弱く？ 強く？」

「っ、っよく、——あっ！ んんっ」

ナオ君と私の顔は五センチくらいしか離れていない。要望通りに強めに握って、根元から先端に向かって擦った。私はこういう経験は今日が初めてだけど、さすがに知識くらいはある。ナオ君の顔が一気に蕩ける。苦しげにも聞こえる荒い呼吸が私の口にも入ってきてしまう。

「あはは、ナオ、すっごく気持ち良さそうにしてる。なっさけな

い声」

「ほんと、気持ち良さそうな顔してるね。ナオ君、かわいい。きもちいいの？」

「あつ、やら、はずかし、んっ」

しゅ、しゅ、と手を動かすたびに、ナオ君が可愛い善がり声をあげる。まばたきすら勿体ないと思えて、その溶けた顔を観察した。

「ねえ、ユイちゃん。後ろもやっていい？」

リリカちゃんは、やっぱりナオ君ではなく私にそれを訊いてくる。可笑しいのは、この状況をすでに受け入れている自分がいるこ

と。次に何をするのかを私が決めてもいいんだな、って。

「うん。ナオ君がもつとかわいくなるところ見たい」

「はい。あはは、女の子二人に前と後ろを責められて、戻れなくなっちゃうね♡ もう普通のセックスじゃ満足できなくなっちゃうんじゃない？」

リリカちゃんのその言葉に応えるように、ナオ君の体がゾクゾクと震えた。

本当にそう思う。こんなことを経験しちゃって、私、戻れなくなっちゃうかも。……でも、戻るってどこへ？

リリカちゃんがまたナオ君のお尻に指を埋めていった。それに合わせて、ナオ君が目を開く。

「あっ、やら、……ッ！ どっちも、だめ、なのに、ああっ、んんっ！」

もうどちらから音がしているのかも分からないくらいに、前と後ろからぐちゃ……ぬちゃ……とえっちな音が鳴っている。ナオ君の背中を見下ろしているリリカちゃんは満足げな表情をしていて、いつも以上に綺麗だった。

「も、むりっ、ユイちゃん……っ！ いき、たいッ！ あっ、む

りっ、いく、」

「待って。まだ我慢して。もつとナオ君のかわいいところ見せて」

「なんで、……っ、やあ、あっ、」

「我慢して。がんばって、ナオ君」

「ユイちゃん、ひどいつ、むり、なのにい」

「ナオ君ならできるよ。我慢して、まだ」

ガクガクと震えながら、ナオ君は唇を噛む。私のお願いをちゃんと聞き入れてくれて、嬉しい。私はナオ君を責める手を速めた。リカちゃんも手の角度を変えて激しく責め立てている。

「ああ、むりっ、ユイちゃ、ん、許して、えっ、あっあっ」

「ナオ君、かわいい♡ がんばって」

がんばれ♡ と応援しながら、ぐちゃぐちゃに濡れているそこを扱きあげる。根元を握った手を先端へスライドさせて、くびれている部分をくすぐり、手のひらで先っぽを撫でつけ、また根元へ。きつとりリカちゃんも、ナオ君の敏感な場所を執拗に責めている。

目の前にあるナオ君の両目が、チカチカと飛んでしまいそう。目が合っているはずなのに、焦点が合わない。形の良い唇が開いて、すごく情けなくて、ひどい顔。それなのにいつも以上に魅力的に見

える。

「かわいい、ナオ君。もつとその顔して。可哀想な顔、見せて」
「ああっ！　いきた、いつ！　ゆいちゃ、りりか、ゆるし、あつ、いき、たいよお……ッ！　んんっ、アッ」

ナオ君が何を訴えているのかを正確に聞き取ることはできない。
「許して、いかせて」の言葉が善がり声に飲まれてしまっている。
「まだだよ」「だめだってば、バカ」「かわいい♡」「早漏が」私
とりりカちゃんの言葉に、ナオ君は追い詰められていく。

「やあッ、むり、——あっ、いく、いつ、ッッ！」

一際大きく体を痙攣させたナオ君の腰が落ちた。私の膝の上に体重が乗って、お腹のあたりがじわりと温かくなる。どくんどくんと何度か震えて精液が吐き出される。服を汚されているというのに、嫌な気持ちは微塵も湧いてこなかった。

「ふふ、我慢できなかったね……♡」

「あははっ、ユイちゃんに早漏バレしてる」

私とりりカちゃんはナオ君の体から手を離す。ナオ君は「んっ」と鼻に抜ける声を漏らし、私の首に回した両腕を引き寄せて甘えるみたいに擦り寄ってきた。

「うう、リリカほんとにきらい。なんで、こんなのひどい」

「……私のことも嫌いになっちゃった？」

ナオ君の顔は私よりも高い位置にあるのに、顔色を窺うような媚びた表情をする。

「ユイちゃんのこととは好きだよお。……俺のことは？　こんな情けないところ見て、ほんとに引いてない？」

ナオ君の不安そうな声に胸がキュンとする。

「引いてない。ナオ君、すごくかわいかったもん。もつと見たいって思っちゃった」

「本当に？ あ の、 ユイちゃんもしてくれるって、 いうのは……？」

「うん。私もしたい。あ、でも今日は爪長いしネイルしてるから……次に会うときは切ってくるね」

ナオ君も準備してきてね、と付け加えると、ナオ君は口をきゆうと結んだ。目を細めて、まるで胸キュンしているみたいな。

「ユイちゃん、優しい♡」

リリカちゃんはすでにナオ君から興味を失ったのか、立ち上がってキッチンで手を洗っている。でもナオ君は私の上から退く素振り

を見せない。

どうしたの？　と思っていると、ナオ君が切羽詰まるように言つた。

「ユイちゃん、キスしたい。していい？　だめ？」

「え!？」

「お願い。俺がちゃんと言えたら、なんでもしてくれるって、ユイちゃんさっき言ってた」

超至近距離で壁に追い詰められているから、ナオ君が少し顔を近づければ簡単に唇を奪うことができるのに、ナオ君はそれをしな

い。ちゃんと強請^{ねだ}ってくるから偉い。

「お願い……。キスしちゃ、だめ？」

「キス、したいの……。？」

「うん。すごくしたい」

ナオ君は大学でよく見る人当たりの良い笑顔でも、リリカちゃんと言いつけているときの呆れたような表情でも、さっきの蕩けた顔でもない。ただ真剣にキスの許可を求めてくるから、あわわと思いつつながら私は頷いた。

「ユイちゃん、ありがとう。すごく好き。だいすき」

覆い被さるように落ちてきたナオ君の顔が、私の唇にキスをする。さつきまで可愛い声を出して震えていた唇が触れて、体がキュンとした。息が苦しくて開いた口に、ナオ君の熱い舌が侵入してくる。

「んっ」

「はあ、ユイちゃん、すき……」

両手を握られて、お互いの手のひらが隙間なく密着する。恋人繋ぎをしながらするキスが甘くて、腰が抜けそう。

「ちょ、ナオ君……っ、んっ、待って、」

ファーストキスにしてはえっちなキスすぎない!?　　と思いながらも、ぐいぐいと体を押しつけてくるナオ君によつてベッドの上に倒されていく。口内のどこも舐められてない場所がないくらいに、ナオ君が私の口内を味わっている。で、でも、必死なナオ君も可愛いけど、ちよつと待つてほしいかも!!

「んーっ」

ちよつとだけ待つて!　　と言いたいのにな、口が塞がれているから叶わない。どうしようと思つていると、ふいにナオ君の体が離れた。

「いっつたい!!」

「バカ者。ユイちゃんが嫌がつてんでしょーが」

いつの間にかナオ君の横にいたりリリカちゃんが、ナオ君の後ろ髪を鷲づかみしていた。ぐいと引っぱり、私から引き剥がす。

ナオ君がハツとした顔をしたかと思うと、リリカちゃんの手から逃げて私の前に正座した。

「ごめん! ユイちゃん、嫌だった?」

「嫌ってわけじゃないけど、私、初心者だから……驚いちゃった」

「ご、ごめんね!? 夢中になっちゃったというか、こうブワアって

なっちゃって、ごめん」

「うん。あの、キスされるのは余裕なくなっちゃうから、私がするね」

「へ？」

何を言っているの？ とナオ君の目が言っている。キスされる側なのは心臓が保たないけど、自分からするならコントロールできるから。

私はナオ君のすぐ目の前に移動して、体温の高い頬を両手のひらで包んだ。それだけでナオ君の瞳が潤んで、表情に期待が滲んでい

く。

「次からは、キスしたいじゃなくて、『キスして』ってお願いしてほしいな」

そう言って、触れるだけのキスをしてあげると、ナオ君はへなへなと仰向けで倒れてしまった。

「……もう無理……おれ死ぬ……」

「ほんつとにちよいな」

「……もうどうとでも言え……」

ベッドに仰向けに倒れるナオ君を無視して、リリカちゃんが私の

手を引いて起こしてくれた。リリカちゃんは心底可哀想なものを見る目をして、私のお腹のあたりに視線を向ける。

「うっわ……。最悪じゃん。大丈夫？　可愛い服なのに汚されてるし……。可哀想に」

「えっ、ああ、うん、大丈夫だよ」

「すぐ洗濯しちやおか！　私のパジャマ着る？」

「ありがとう。パジャマは持ってきたから大丈夫。洗濯機だけ貸してくれる？」

「うん！　このままお風呂も入っちゃうよね？　案内するねえ」

二人で部屋を出るとき、リリカちゃんが足を止めてナオ君の方を見た。私に対する声より二トーンくらい低い声で言う。

「あ。ナオはもう帰ってね」

「え、……は!？」

「は？ まだいるつもりだったの？」

「酷くない!？」

「あのさあ？ 今日私は私とユイちゃんのお泊まり会だったの。あんたがどーしてもって言うからご飯は誘ってあげたけど、泊まりには呼んでないわけ。帰れ」

ショックを受けたみたいなお顔をしているナオ君が、助けを求めるように私に視線を向けた。うーん、可哀想だなあとは思いうけど。

「ナオ君、ごめんね？　また遊ぼうね」

「えー！　ユイちゃんまで……」

「今日は私とユイちゃんだけでコイバナするって約束だったの！
あんたは邪魔！」

「コイバナ!?　ユイちゃんの!?!」

「あんたに言うか！　バカ！　しつこい男は嫌われるよ！」

リリカちゃんはナオ君に近づき、床に落ちていた服を投げつけ

た。着替え終わるのを待ってから、ナオ君の体をズルズルと引きずり玄関に連行する。廊下ですれ違ふとき、ナオ君は壁に手をついてリリカちゃんに抵抗した。

「えっ、あの、ユイちゃんも俺のことが好きってことでいいんだよね!? あれ、もしかして勘違い!? 他に好きな奴いるの!？」

「あんたまじでダサい! 嫌われろ!」

「リリカ! 引っ張るな!」

ギャーギャーと言いつけている二人が可笑しくて、必死なナオ君がリリカちゃんの言うとおりでダサくて、私はお腹を抱えて笑ってし

もう。答えを貰えていないナオ君は頭にハテナをたくさん浮かべている。

「ユイちゃん、あの、ちゃんと告白させてね！ 明日！ 明日また来るから！」

「あはは、うん。待ってるね」

スパーン！ と小気味良い音を鳴らして、リリカちゃんはナオ君の頭を叩いた。

私とリリカちゃんに追い出されたナオ君の背中では、なんとなく哀愁みたいなのが漂っていて面白かった。

ナオ君は、リリカちゃんのマンションから歩いて五分くらい
の場に住んでいるようで、「今度いきなり行って驚かせよっか♡」
と、リリカちゃんはやっぱり小悪魔的に笑った。

ベッドに入ったときに教えてもらったのは、ナオ君と私は去年の学祭で話したことがあるということ。覚えていない私に、「詳しいことは本人から聞いてね」とリリカちゃんは意地悪に笑む。

スマホが振動したことに気がついて画面を見ると、チャットの通知だった。差出人はナオ君。

『今日は色々驚かせてしまっでごめんなさい。でも、俺の気持ちには本当です。明日ちゃんと話をさせてください。リリカ抜きで！』

同じベッドで寝ているリリカちゃんにも画面が見えてしまつて、リリカちゃんは呆れたように言つた。

「うわ、生意氣〜。私がいたからユイちゃんと話せるようになったくせに」

「あのさ、リリカちゃん」

「ん？ なーに？」

布団の中で向かい合うようにすると、リリカちゃんは優しく言葉を待ってくれる。

「今日はやり方を教われなかったから、また今度教えてくれる？」

「それはもちろんいいけど、いいの？ 私、邪魔じゃない？」

「ううん、邪魔じゃないの。私ね、二人と一緒にいるの楽しいんだ。あつ、逆に私の方が邪魔じゃない？」

不安になって訊くと、リリカちゃんは首を振る。

「邪魔なんてことあるわけない。ユイちゃんなら、私とナオの間に入ってもいいなあって思ったの。ていうかアレだね、むしろ邪魔なのはあいつだね」

悪戯っ子みたいに笑ったりリリカちゃんが可笑しくて、その日は朝方まで二人で他愛のない話をした。次の日は昼頃まで寝坊してし

まっつて、いつまでも連絡のつかない私たちにナオ君がやきもきしたのは言うまでもない。

《第二章につづく》



ユイちゃん×ナオ君＋リリカちゃん
きりしま

発行日 2026年9月18日

発行 夜霧流るる

本書の無断転載・複製・再配布はご遠慮ください。